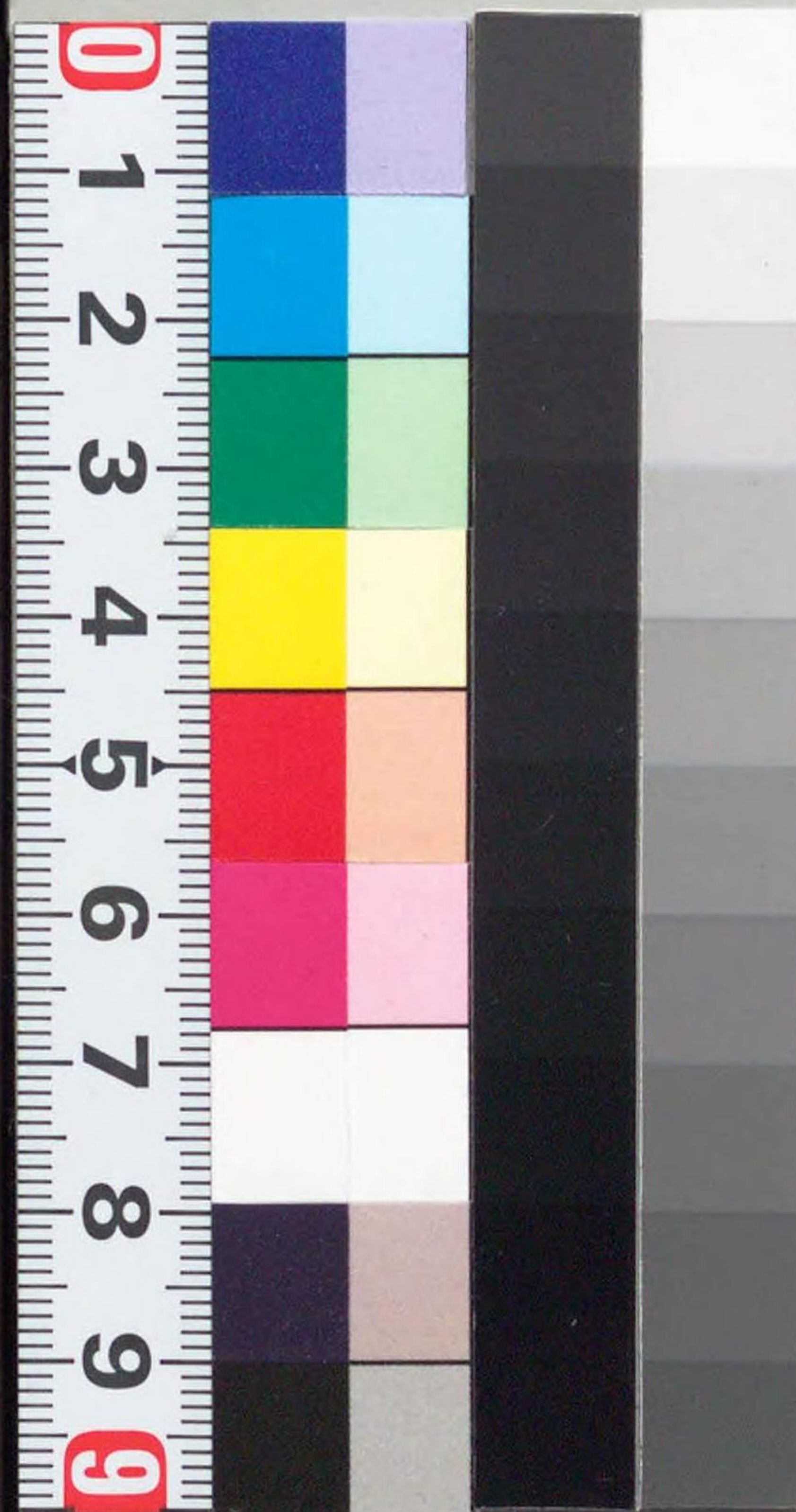


911.168  
Sa266r

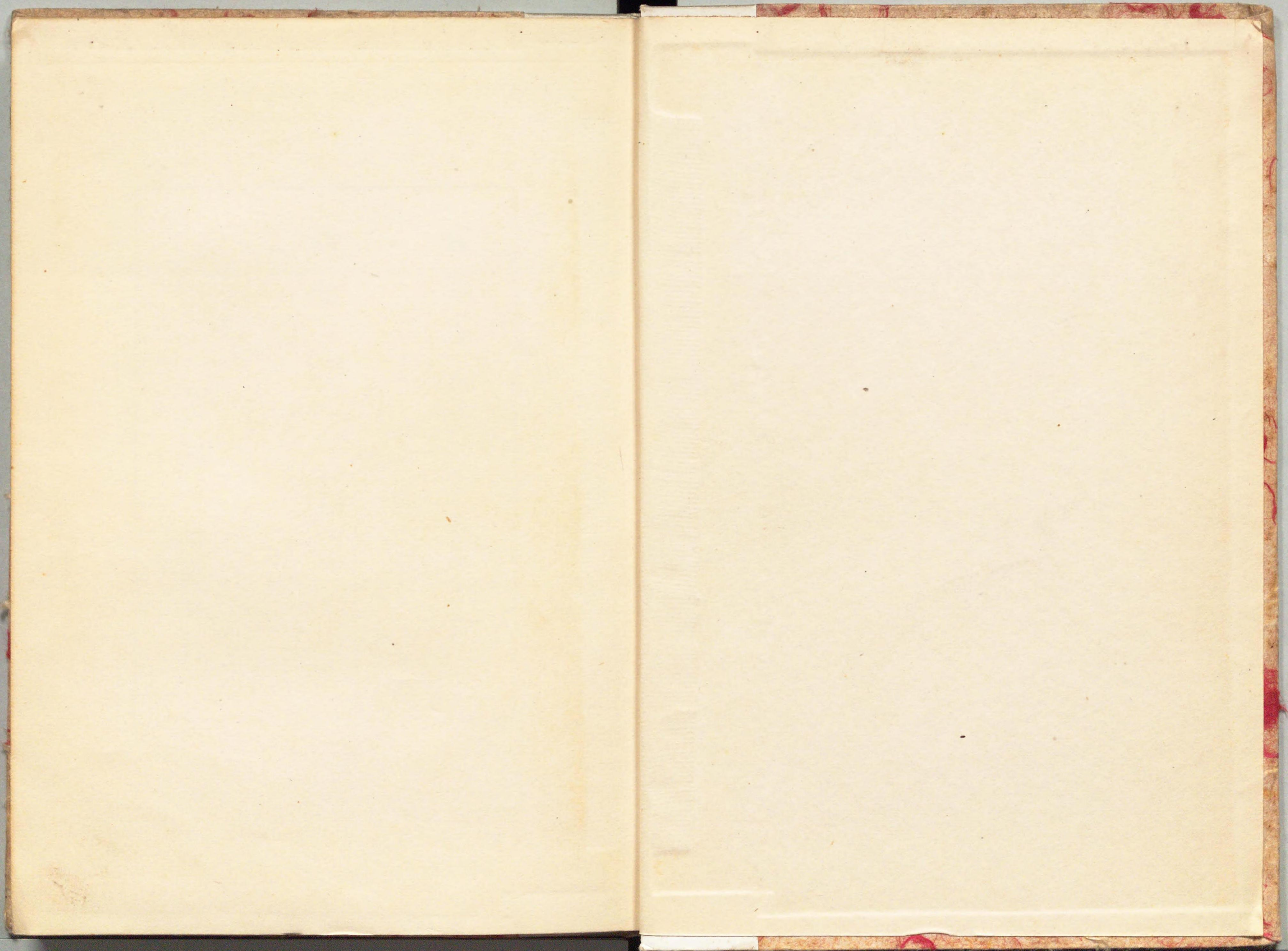


00218557



911  
Sa







齋藤茂吉著

〔アララギ叢書第百四十五篇〕

歌集  
連山

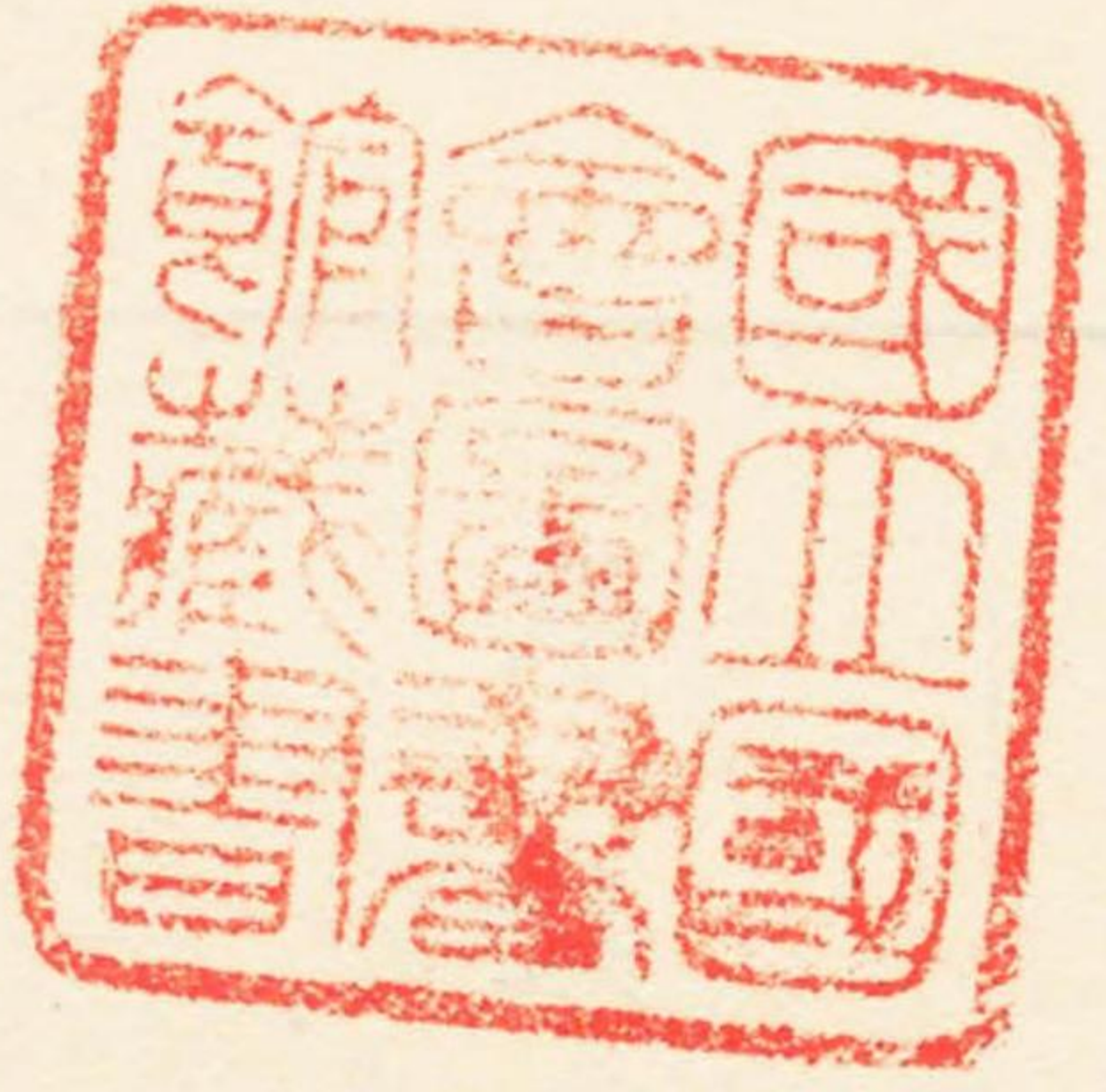
岩波書店刊行



滿洲遊行

目次

大連(三十一首).....	三
旅順途上(五首).....	四
旅順(十七首).....	六
南山(八首).....	三
千山途上(八首).....	五
千山其一(十四首).....	六
千山其二(八首).....	三



218557



千山歸途(八首)……………三六  
遼陽(八首)……………三六  
黑溝臺(十九首)……………三三  
奉天(遼寧)(十六首)……………三三  
北陵(十七首)……………三五  
東陵(十一首)……………六一  
撫順(十一首)……………六五  
哈爾濱 其一(十一首)……………六九  
哈爾濱 其二(十七首)……………七三  
滿洲里途上 其一(十一首)……………七九  
滿洲里途上 其二(二十八首)……………八三  
滿洲里(十七首)……………九三

歸途 其一(十一首)……………九二  
歸途 其二(十七首)……………一〇四  
歸途 其三(十七首)……………一〇九  
哈爾濱(八首)……………一一五  
南下(十七首)……………一二八  
吉林途上(十七首)……………一二四  
吉林松花江(十七首)……………一三〇  
吉林(十四首)……………一三六  
吉林より四平街(十七首)……………一四一  
四平街(五首)……………一四七  
四平街より鄭家屯(五首)……………一四九  
オボ山(十四首)……………一五五



鄭家屯(十一首).....一五六  
 金山驛(八首).....一六〇  
 歸路(十一首).....一六三  
 奉天(十首).....一六七

北平漫吟

北平途上(四十七首).....一七三  
 故宮(五首).....一八九  
 萬壽山昆明池(十四首).....一九一  
 玉泉山(五首).....一九六  
 天壇(十四首).....一九八  
 城門城壁(八首).....二〇三

朝鮮・日本本土

北平圖書館(八首).....二〇六  
 喇嘛廟(五首).....二〇九  
 孔子廟辟雍殿(十一首).....二一一  
 萬里長城行(二十首).....二一五  
 中海南海瀛臺(八首).....二二三  
 景山北海(十一首).....二三五  
 陶然亭其他(十七首).....二二九  
 歸路(十一首).....二三五  
 朝鮮(四十三首).....二四一  
 日本本土(十四首).....二五八



歌集  
連  
山

後記

三五

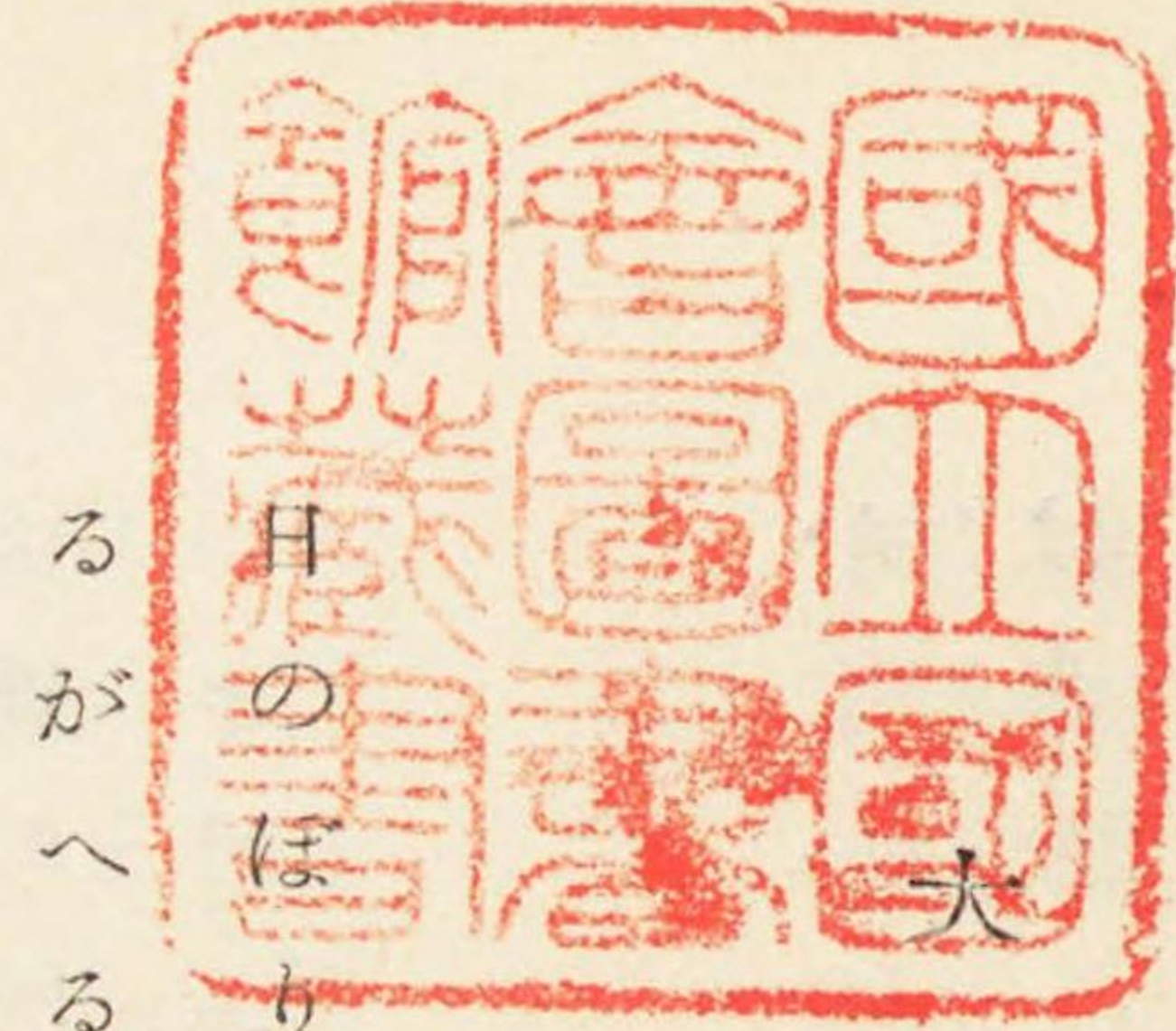


滿洲遊行

卷之二



ひらかむとする  
目のまへに断崖あかく見え來り籠めたる狭霧



るがへる

て美しき光足らへれば大連の海鳥ひ

連 (十月十六日)





汽船より直ぐ目前めのまへに大きな埠頭ふ頭がありて吾は對むかへる

大連の埠頭ふ頭にうごく物ものなべては時ときの間まおかぬ  
いきほふ堆積たいせき

かくしつつかちからの動き止とどまらぬ近代都市きんたいとしを二人は歩あむ

星が浦ほしがうらの白波寄しらかなするゆふぐれを日本にほん人と共に洋人やうじん華人わにん

大洋おほつみを渡りはらからは新あたらしき興運いきんとしてここにいそしむ

小崗子しょうかんにふたり足とどむ雜然ざつぜんと躊躇ちうちよなくして傳來てんらいの燻いぶあり



路傍ろぼうに兩替屋りやうがへやありて「財通百川ツァイツァンパインシャン、公平交易コンピンチョウウイ」云々うんぬんぞ好き

小盗兒シヤオトール市場いちばは有名にして誰も訪ふ「堆金積玉ツエチンチユ」の語に邪氣じやきなかりけり

たゆるまも無くてあつまる做工者さくしやの動力ここに整頓せいとんせらるる碧山莊

天徳寺も萬靈塔も此處にあり苦力クリイは現身うつせみゆゑに亡なきのちのため

ここには苦力クリイのことを華工クワコウと謂ひ一萬三千を常に住ましむ

饅頭まんとうを頬ほばる時ときも痘痕あはたある顔かほ一面いちめんを笑みかたまけて



華工頭は妻帯をしてここに住むその食物も差別あらむか

門のある一割の家のまへに居る二頭の妻をさな兒抱けり

此の莊を廻りて誰か現實の苦力樂士といふを拒まむ

労働の區切がありて苦力からの静かなるときに笛吹くきこゆ

碧山莊の高きによりて金州に日のおちかかるしづけさ見たり

南華園に日本の秋の草花のすでにすがれむとしたりが勻ふ



アララギの友あひ集ふ歌がたり登瀛閣の燈火  
あかく

同胞は營まむとしていろいろの樹を植ゑにけ  
りこの異ぐにに

この海に刀魚釣るを樂しむとわが同胞は語り  
てやまず

老虎灘の空になびけるうすき雲冬來むとして  
たなびける雲

驢馬騾馬の列つらなりて老虎灘のこの岩道を  
越えゆくらしも

東南へ越えてしゆけば石磴屯といふ佳景の中  
華部落あり



伊勢町を夜もとほれば植木市あり身に沁むも  
のか小さき紅葉も

羅振玉翁の家にて友待つ間朱墨の大きなるを  
買ひ得たり

共和樓に高粱酒をも少し飲み吾が血脈を太く  
ならしむ

大連の圖書館に来て一たび見たり海源閣本楊  
紹和氏の書 松崎鶴雄先生

大連の浪速町をも素どほりす明日は金州へ立  
たむとすれば



## 旅順途上

督軍等の家々が見ゆ心安んずれば子孫のため  
をもおもふ

鼻ほじる小孩が立つ水邊の直ぐかたはらに鵠  
居りて

海岸に近づき来れば鹽田もあり龍王塔の水源地  
地いつく

玉の浦の海岸の浪しろし旅大八景も間も無く  
過ぎむ

うつくしき海邊をとほる時ありて自動車を降  
る七分あまり



旅 順

鉢巻山と簡素なる名をつけて薄りてゆきし山  
は近しも 盤龍山北堡壘

二龍山堡壘に坑道を鑿りたりしその戦を偲び  
てやまず

飛行機の無かりし戦にもろともに命をかけし  
跡どころこれ 東鷄冠山北堡壘戦跡

ゆるやかにしづまりかへるあたの堡に勇猛の  
兵せまりてかへらず

水師營の會見所にて書きとどむ棗の樹より血  
しほ出でけむか



風音が下の方よりきこえくるこの山のうへの  
現身われは 二〇三高地

紅くなりて傾きそむるあまつ日を戦てらしし  
光とおもはむ

年ふれる壕のなかよりわが兵の煙管出でしと  
聞くが悲しさ

戦の激しさも既超えはてて一かたまりに迫り  
ゆきにし

風さむきこの山の上に吾ありて君と去りかね  
き日のしづむまで

今の世の人も見たりき後の世の人も見らむぞ  
永久に偲びて



ここに立ちてふりさくる旅順の山山はおほど  
かにして涙しながる

二百零三高地なる石の上に三人は居りぬ日は  
おちゆきて

この塔に身は近よりていくそたびものをぞお  
もふ白きこの塔 白玉山上

眼のまへの櫻の木々もかくのごと大きくなり  
て秋落葉すも

一たびを旅順に來なばおもはなむ命をかけし  
もののみなるを

導きし友の二人とたづさはり鶉めづらしむ寒  
きゆふべに 八木沼氏・藤懸氏



南山

金州の驛に著きぬれば日本語にて林檎を賣れり支那の小孩

此處にして見ゆるなべての山々に木なかりし頃ぞその戦は

フオーク軍の散兵壕のあとに立ち見さくる時にわがこころ燃ゆ

暁より日の暮るるまで薄りつつ二千の兵はここに果てたり

金州灣を吹き來る冬の風をいたみわれの體もときどき震ふ



劇しかりしその戦のあとどころ冬の深まむ小  
鳥のこゑす

この山のかげにかたまる露西亞墓地女の墓も  
ここにあるらし

おのづから南扇嶋の名に負へるこの低山を今  
くだるなり

### 千山途上

やうやくに山に入りつつ道すがら山蠶の話  
幾つも聞きぬ

青年のひとり山口に立ちゐつつ「看山」をすと答  
ふるも好し



山の間の青雲くわん觀の白菊をただかりそめのもの  
とおもふな

道觀だうくわんに飼はるる猫はキヤラメルを今食はむと  
してよろづを忘る

狼おほかみのこゑする山と聞くだにもこの一廓いっくわくの觀くわんの  
きびしさ

麓より豆腐とうふかつぎてのぼり來し若き道士だうしと觀くわん  
にちかづく

たたなはる山をのぼりて汗垂りし普庵觀ふあんくわんにて  
水を愛をしむも

ここに住む現身うつつせみなべて水ををしむ五佛頂上ごぶつちやうじやうに  
あはれ泉いづみなし



千 山 其 一

龍泉りゆうせんに石門せきもんふたつ入りしころ灯赤ともしびくすでにと  
ぼりつ

山寺やまでらの冬の深まむことわりに鐘樓しょうろういつぱいに  
干す唐辛子たうからし

蟋蟀こほろぎのこゑぞ聞こゆる山中やまなかのこの寒き夜の炕かえ  
に近きか

無量觀むりやうくわんに鹽漬しほづけありて口ひびく辛からきを食へば夜  
ぞ更けにける

ひくく吊りしラムプともりて蓴菜じゆんさいの鹽辛しほからきを  
もこよひは愛めでつ



油燈ゆとうにて照らし出されしほ佛ほとけに紅べにあざやけき  
柿かきの實みひとつ

うつせみの眼めがさめしかば佛ほとけの山やまのさ夜中に  
して驢ろのこゑ聞こゆ

暗闇くらやみに足音あしおとぞするうちつづく足音あしおととおもふ吾われ  
の目ざめは

この山のおのおのの僧あつまりて勤ごんは朝あしたのま  
だ暗きより

をさなくて入り來りけむ幾たりか菩薩ぼさつとなり  
て出でて行きつる

この谿のうへの空そらよりかがやきて星見ゆるを  
も昨きのうの夜は見す



一巖が一山をなすうへにして堂の口より今しがた人入りぬ

石のうへの小坐禪堂に文字あり「對此芒芒」笑爾芒芒

色の欲此處に封じて一冬を越えむとしつつ干す唐がらし

千山其二

あらがねの香のする水に面あらふ支那千山のひとつあかつき

山水がここに流るればもろもろの落葉の中に下がくれけり



中腹ちゆうぶくの小堂せうだうに木魚もくぎよの音おとせれど千萬せんまんの人聞ひとくこ  
ともなし

冬山ふゆやまの寺てらの木こぬれになつめの實みはつかに残のこり  
鳥とりのまにまに

桑門さうもんにして唐辛子てうしんし日向ひなたに干ひし白菜はくさい積みぬ現身げんじん  
利益りやくのため

あやしかるものごとくに谷々たにたににあまねく朝  
の日は差しにけり

梨なしの實みは木こより墜おちつつ終まはるあり僧來そうきたりあ  
また貯たくはふるあり

狼おほかみのこゑがきこゆといふまでに山の夜よふけは  
あらくしづみぬ



千山歸途

千山の谿をくだりて來し路は中腹にして湧く  
泉あり

松の太樹路上にありて下がげに日本のごとき  
おもひをしたり

いま一つ泉がありて鐵分を含めるといふ共に  
掬びつ

すでに平地となれるところにいつしかに水激  
つ音聞くは樂しも

婦ひとり畑を耕す没法子の如しといへばあは  
れに聞こゆ



白楊びやくようの木の並木なみぎとなりて村落そんらくのあるところを  
もなほし歩むも

おもほえぬ空そらの彼方かなたとなりけりかたむきて  
見ゆするどき山は

沈鬱しんいつになりて紅山こうざんのそびゆるを吾われ一夜ひとよ寐し山  
とおもへや

遼陽

太子たいし河がにかからむとして東方とうほうに露軍堡ろぐんぼのあと  
いまだ見るべく

城内じやうないに較ぶるときは何ゆゑのこのしづけさと  
問はむとぞする



乞<sup>こ</sup>丐<sup>が</sup>の面<sup>めん</sup>前<sup>ぜん</sup>の文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>可<sup>か</sup>憐<sup>れん</sup>我<sup>わ</sup>的<sup>てき</sup>瞎<sup>しゃ</sup>子<sup>し</sup>善<sup>ぜん</sup>心<sup>しん</sup>的<sup>てき</sup>老<sup>ら</sup>爺<sup>や</sup>太<sup>たい</sup>

太<sup>たい</sup>城<sup>じやう</sup>内<sup>ない</sup>

北<sup>きた</sup>へむかふ汽<sup>き</sup>車<sup>しや</sup>よりおりて遼<sup>りやう</sup>陽<sup>やう</sup>の白<sup>はく</sup>塔<sup>たふ</sup>のもと  
に二<sup>ふた</sup>人<sup>たり</sup>は立ちぬ

遼<sup>りやう</sup>陽<sup>やう</sup>の朝<sup>あした</sup>のめざめ鵲<sup>つと</sup>がすぐ眼<sup>まな</sup>のまへの土<sup>つち</sup>にも  
下<sup>お</sup>りたつ 遼<sup>りやう</sup>陽<sup>やう</sup>館<sup>かん</sup>

遼<sup>りやう</sup>陽<sup>やう</sup>戦<sup>せん</sup>の大<sup>だい</sup>規<sup>き</sup>模<sup>も</sup>なりしことおもひ吾<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>かたみ  
に眼<sup>まな</sup>險<sup>げん</sup>熱<sup>あつ</sup>し

城<sup>じやう</sup>内<sup>ない</sup>を吾<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>は歸<sup>かへ</sup>るごみごみと争<sup>あそ</sup>ひに似<sup>に</sup>つるこ  
ろを後<sup>しり</sup>へに

口<sup>くち</sup>食<sup>しょく</sup>の官<sup>くわん</sup>能<sup>のう</sup>をもて朝<sup>あさ</sup>さむる民<sup>たみ</sup>のつどひもおろ  
そかならず



黒溝臺

沙河對陣の一變化として劇しかりし黒溝臺戦  
の名をぞとどむる

吾にては立見尙文彼にてはグリッペンブルク  
の名をぞとどむる

ひとときは焰をなせるミシユチエンコの能働  
戦をおもはざらめや

わが兄の戦ひたりしあところ蘇麻堡を過ぎ  
てころたかぶる

一月の二十五日は渾河の水すでに氷りてをり  
たるらむか



八師團の兵の築きし土堡一部残れるがうへに  
暫したたずむ

我軍の書附いくつも保存せり登殿印は七十に  
なりて

「大鼻子」のせまり來れる方嚮と眼ひかりて登殿  
印立つ

わが左翼に雷なしてせまりたるミシユチエン  
コ軍を語りて止まぬ

劇しかりしこの戦をおもふとき渾河を越えて  
入目のなごり

うねりつつ流れて來る渾河には此岸たかく彼  
岸ひくし



向うよりおりて來れる馬車うまぐるま渾河のみづをたち  
まぢわたる

黒溝臺の夜よるふけにして高粱酒かおりやんちゆの透明とうめいのみて醉ゑ  
ひはきはまる

こもごもに心に迫せまるものありて黒溝臺の夜よるを  
ねむらす

機關銃のおとをはじめて聞きたりし東北兵とうほくへいを  
吾はおもひつ

太陽の紅あかくいでしを戀こほしみて暫しばしして登のぼと名  
残ごりををしむ

幾千いくせんといふ鴉あひらの飛ぶを見て渾河のながれお  
もほゆるかも



馬車はげまし修二堡にたどりつき饅頭くひぬ  
村人と共に

平康里の廣告ありて名を示す翠里、金鈴、雅琴、等  
等

奉天 (遼寧)

低くなりて空に動くに心親しむ奉天に來て雨  
雲見たり

奉天の瀋陽館にわが著きて日本女のこゑを親  
しむ



ここに於て大學同級の友ふたり大成おほなり、潔きよし、森川もりがわ千丈ちんぢやう

奉天は歴史ゆたかなる都市にして吾を導みちびく八木沼やまぬま丈夫ぢやうぶ

「十方」といふ扁額を見し十分じゅうぶん後ご沐浴室を見つゝ過ぎたり

清真寺しやうしんじ、黄寺わうじ、太清宮たいせいきゆうをおとづれてやうやく疲る日は暮れしかば

南門なんもんをくぐりし時にいそがしく大山總司令官のこと語る

奉天の大包围戦の莊嚴さうげんを現うつのいまによみがへらしむ



太陽の紅き光はくろずみて奉天のはてに入り  
ゆかむとす

奉天の吉順絲房の屋上に一望としてたたへざ  
らめや

明湖春飯店にてのわが手帳醉蟹紹興酒等のほ  
かに何も無し

旅とほく來つつ見たりき殿堂の青丹は古りて  
ものは移ろふ

帝王のいきほひにして年ふりぬ崇政殿に正大  
光明の扁

奉天の春日通に米商あり「胚芽半搗米」といふ貼  
出あり 三時五十分發長春に向ふ



## 奉天大成無著居士宅

はるかなる旅をおもふにふた夜さへ君とあひ  
見ていひ食ひにける

あわただしき旅のゆくへのひと時を君が家居  
にこころ休らふ

## 北陵

日もすがら断えぬ松風の音のする隆恩殿りゆうおんに近  
づきにけり

石獸せきじゆうのそばを過りて朝ざむき苔の上なる赤棟あかたか  
蛇へびの子



傳道かほらみちにいつしか草のしげりしが冬のひそけき  
ころとなりにし

旅びとはすなはち首あげにけり松かせの吹く  
大きみたまや

四つ隅に角樓かくろうのあるみたまやを今の現いま うつつに見て  
過ぎむとす

暫しばしして寒さおぼゆる身を安やすむ隆恩殿の石の上うへ  
の龍りゆう

その後のちに生あれて大理だいりの石だたみ幾いくたりか踏ふみ  
し白しろいしだたみ

こもりたる隆恩殿の庭にして冬の光は限くまさへ  
もなし



帝みかどらは次つぎ々の代よに來たまはむそのしづ心こころ現うつに  
せりき

乾けん隆りゆうの代よの碧あを丹になるみたまやの雲は北ゆきて  
鳥のこゑごゑ

こひねがひつひに來きたりし明あき樓ろうの朱あかのいろ古り  
ぬしづかにもあるか

日の光させる木こ立たちにこもりたるこのみささぎ  
の中うちはしづけく

みささぎのうへに年ふる楡にれの樹きに鵲うづ來啼きくひ  
とつかささぎ

露つゆじもの未まだ乾ひぬ道みちに一人ひとりをり古への代のい  
きほひおもひて



一冬ひとふゆに入らむよすがと寢陵しんりやうの草に朝夕あさ霜あきふりぬべし

黄の瓦碧あをき瓦のみたまやしづまりいますことの尊たうさ

もどり来て二たび過ぐと隆恩門とんいんの紅あかき扉とびらに吾はむかへり

東陵とうりやう（福陵ふくりやう）

ひむがしの陵みささぎくれば朝あさ靄もやのひくき國內くわにちに渾河こんががながる

天柱てんちゆう隆崇りゆうしやうと歌ひたまへるみささぎは谷のまにまに此處こゝにこもれり



松木立ふかきにこもる陵よ童子いはく門不開  
門不開

東陵の裏のたをりに國ゆくや渾河のながれ既  
に見おろす

紅き扉は閉されありて山の小鳥の聲おびただ  
しあやしきまでに

この陵の門の屯兵にまじりゐる少年兵のをさ  
なきこゑす

みたまやの外園をなす浅き谷紅葉すがれて朝  
のつゆじも

草の實の赤き採りつつ疱瘡の痕ある童子ここ  
にも遊ぶ



うねりたる渾河見えそむ秋空のふかぶかとせ  
るその下びにて

つゆじもに濡れたる草にかすかにて音にし  
づるは蟋蟀ならず

寢陵をのぞみめぐれば親しきや鵲ひくく谷を  
し渡る

撫順

黒々としてよこたはる炭鑛を天が下に見て言  
ぞきはまる 十月二十七日

廣大にして露天掘なる炭鑛を旁觀的に吾も觀  
がたし



目前まへに十億噸の石炭を藏かくすることを知れよと  
ぞいふ

炭坑たんこうのうへをしづかにめぐりたり張學良の飛  
行機一機

遠くまで指ゆびさす方かたを目守まもりけり大山坑おほやまこうにての犧  
牲せきの話

わがそばに琺瑯ほうろう琴しんといふ小婦せうふ居り西瓜すわがの種子たねを  
舌したの上うへに載のす

野ののはての低ひき家かむら見みつつ來きて撫順ふしんの一夜ひとよ  
腹はらをいたはる

天然てんぜんを征服せいぷくしつつあるところ人の行爲かうゐの不ふ邪じや  
氣き迅じゆん速そく



わが體からだに觸れむばかりの支那少女せうぢよ巧笑倩兮かうせうせんと  
いへど解せず

撫順城、舊市街、新市街、すべては渾河こんがの岸に成り  
けり

時々に鈍にぶき爆破のおとするを聞きつつ「小心せうしん小  
偷とう」の貼紙はりがみ見居り

哈爾濱 其一

車房しゃぼうより見えし時のま哈爾濱ハルビン近き地ちのかざり  
に雪は降りける

寒き日の一瞬いつしゆんに命を殞おとしたる伊藤博文いとうひろふみのこと  
をおもひき



北満ホテル第三十五號室の鏡にて伸びしわが  
 頤鬚を見つつつまむ

此處に來てまのあたり吾の接したる雪ぐもり  
 空雪の降る空

まづ此處に旅の心をしづめしむ露西亞中央寺  
 院支那極樂寺

をとめ等の顔佳きに會ふ今日の日よ白系露西  
 亞人ここにつどへる

とことはに悲しき碑の傍に櫻を植ゑしことを  
 聞き居り 横川・沖兩烈士

キタイスカヤ街を歩いて混合の都市の動きを  
 今日見つるかな



露西亞語を日ねもす聞きぬ處女等の往反ふち  
またわれも往きつつ

カウカサスの饌のシヤシリツク、ツベリヤンク、  
カリニエル等並びに透明ウオツカ

夜ふけてより露西亞をとめの舞踊をば暗黒背  
景のうちに目守りき

哈爾濱 其二

日本街に日本の児童歩きゆく心うごけば吾は  
見て立つ

立寄りし哈爾濱日本小學校その暖房は豊けく  
おもほゆ



幽かなるもののごとくに此處に果てし三瓶與  
十松君を弔ふ

おのおのの事に従ふを見むとして十五分ゐた  
る東支鐵道廳

あひ群れて日本の兒らのわらふこゑ聞きつつ  
しばし涙ぐましも

松花江を吾等わたりぬ日の光あをじろく低き  
が背向になりて

この河の黒龍江となるころはひろびろとして  
激ちなからむ

松花江のひくき汀の砂にゐてうたかたのかた  
まり流るるを見たり



傳家<sup>か</sup>甸<sup>てん</sup>の街よりさほど遠からず日本人墓地露  
西亞人墓地

身近くに支那語の尻<sup>しり</sup>ひく發音を聞きてよりは  
や幾<sup>いく</sup>日<sup>にち</sup>なるか

貧民街ナハロフカをも歩きたりすべて行<sup>ゆき</sup>ずり  
の物とおもはず

夫人<sup>ふじん</sup>を介して短詩<sup>たんし</sup>チャストシユカをいふスキ  
ターレッツ氏のふとき大<sup>おほ</sup>き手<sup>て</sup>

哈爾濱<sup>ハルビン</sup>の南<sup>みな</sup>市<sup>いち</sup>場<sup>ば</sup>に痘痕のある女<sup>をんな</sup>の子<sup>こ</sup>らを二三  
人見つ

おなじ街區<sup>がいく</sup>に猶太寺院二つもあるを心にとめ  
て吾は入りゆく



ニコライスキイよりの鮭も並びぬ山雉やまきじがつる  
され並びゐる傍かたはらに

いそがしく街を見まはり踏み減りし石疊道を  
南へ來るも

フイリポワの露西亞食店に午食しゆくせる二時間の  
ちに去りゆくわれは

滿洲里途上 其一

松花江スンガリイを汽車わたるとき白き泡おびただしく  
も流れて居たり

かりがねの群れて眠ねむらむ葦原あしはらのしげりは遠く  
つづくその果はて



遠々し青きいろせる一ところ青きながらに氷  
りたらむか

哈爾濱を北へむかへる野のはてにゆふ雲紅く  
なびきつつあり

たひらけき國內とおもふたまゆらによく見れ  
ば國內おほに起伏す

對青山いまし過ぎたり北の空はつかに蒼く哈  
爾濱をさかる

雁のわたらふ時は空昏くなるばかりとふその  
かりがねよ

この驛に兵の屯のありしかば少年兵のいで入  
るが見ゆ



あひ群れて空をわたらふ雁の道さだまり居り  
といふがあはれさ

空ひくく雁わたり飛ぶときは羽ばたく音もみ  
な聞こゆとふ

山ひとつなき空の西くぐもりてほのかに紅し  
日は入るらむか

満洲里途上 其二

甜草崗に日は暮れむとす隣室よりフランス語  
聞こゆ男の聲のみ

蒙古包の一部が見ゆるのみにして人の音なき  
ところとなりぬ



夜の三時半窗の外に黒き森みえつつ森に雪ふりつもる

大きな岩見えしとおもふばかりに隧道となりながしながし

興安を螺旋の形に登りゆくここに關特拉の隧道ありて

やうやくに興安の嶺のつづきなる起伏がありて夜は明けむとす

數驛を通過すらしき氣配なりしが平野にうつりたるべし

牙克石に著けば雪降りて居り山の中の博克圖驛も遙かになりて



平原にある雪山はおのづから白き石等を見る  
にし似たり

山東の土民百萬年々に移動し來れどいづこに  
居るや

雪ふりし一夜は明けて見るかぎり渺漠とした  
るところにも川あるらしも

曇のなかに憂鬱に白き太陽みゆ興安嶺を過ぎ  
て走れば

雪しろく降りたる山のごときものとりとめの  
なき平野にひとつ

札羅木特に十本あまりの松の樹が見えたるの  
みに心親しも



ハク<sup>ハ</sup>すぎで向へる方<sup>かた</sup>は茫々<sup>ぼうぼう</sup>と雪の曇りの涯<sup>は</sup>さ  
へ見えす

朝たぐれば海<sup>かい</sup>拉<sup>ら</sup>爾<sup>る</sup>に汽車著きにけり露支戦の  
あと累々として

眼のまへに怪<sup>あや</sup>しきまでに見えそめつ雪降<sup>ゆき</sup>りて  
白くなりたる沙丘<sup>さきう</sup>ひとつ  
烏固諾爾<sup>ウコノル</sup>

野のうへに川の流のごときもの見ゆるがなべ  
て凍<sup>こほ</sup>りつらむか

おき伏せる山もあらく降る雪はこのひろき  
野に多くは降らず

まばらなる松の樹が見ゆ北國<sup>きたくに</sup>のかかるところ  
に松の樹あはれ



雪の野に黒きもの見ゆあはれあはれ流ながれの岸きしの  
 士つちとしおもふ

降りつづく雪のあひだに眼めにし沁しむ黄に枯れ  
 はてしその原はらのいろ

戦争のあと著明ちやめいにてしな側がはの壕がうのみだれも暫  
 くつづく 赫爾洪得

木材を積みつつあればわが國の驛のおもひす  
 數秒の間

羊牛馬ひつじうまの放牧あまた見て旅もはるけき思ぞわ  
 がする

ひたぶるに汽車は走りて海うみの面おもて和なぎたる如き  
 平野ひらみえわたる



穂の白く枯れたる草がはつか見ゆかかるもの  
さへ身に沁むものを

平野ひらより高くのぼらぬ太陽たいやうを圍みしごとく虹にじ  
立つあはれ

滿洲里

國境こくきやうの小さき町に嚴きびしかる「人のあはれ」をわれ  
に聞かしむ

慌あわただしと吾はおもふに窓外まうぐわいのすでにくらきは日  
は入りしかも



國境こくさかふ小こさき町ちやうに穉せき等らの日本にほんの歌うたを聞ききつ  
泣なかゆ

はるかなる旅路たびぢのはての一夜ひとよ寐ねに湯婆ゆたんぼをもて  
腹はらをあたたむ

國境こくさかに遂ついに來きりてすき透とほるウオツカを飲のめば  
一夜ひとよ身みに染しむ

わがそばに眠ねらむとするをみなごよ露ろ西亞しあ語ご  
少すこし語かたり聞きかしむ

葯房やくばうの店員てんいんなりしところ聞きけ心中しんちゆうしたる墓はかひ  
とつあり

私わたくしのこころにあらず日本にほん人じん墓はか地の小こさきいや  
はての町



をやみなく雪の降る日に日本人共同墓地に吾  
と君と二人

墓標はかじろし小さく立ちて戒名かいみやうの無き儘なるが多きあ  
はれさ

いやはての國の境さかひに住みつきてをとめの身さ  
へ此處に終りき

春になれば日本人墓地のほとりにも雲雀ひばりが群  
れて啼きのぼるとふ

ものの音とははやも絶えたる國境こくまがらの町の一夜ひとよを  
心しづめむ

ドライ湖こに群れてわたらふ雁かりがねの聲もきこえず  
冬は深まむ



ものの音も絶えはてにけり満洲里の夜ふかき  
空は氷りつらむか

空低ぐひとつ浮べる白雲はいづらに靡くこと  
さへもなし

この朝け空にうかべる雲ひとつほびこること  
も無くて過ぎなむ

歸途 其一

なだらなる國土白くおきふすをおもおもと駱  
駝の列が越え行く

いろいろの國語車房に聞きながら吾も東方に  
向ひつつあり



かすかなる心とぞおもふ雪のうへに枯草の穂  
のなびくを見れば

吹く風は断えざるものかたまゆらも形常なき  
沙漠の上の雪

たちまちに人の世のさま蒙古人紅き衣を著て  
汽車に近づく

218507

この丘を越えつつゆかば乾草を貯ふ部落に行  
かむとすらむ

うちわたす曠野見えつつ雪白き山の間あひだに黄な  
る山あり

かの山におのおのもの谿ありて雪解あふる  
る水ながれむか



黒々と亂れしものに雪降り札來諾爾に軍は  
破れき

二箇師團とどろとどろと薄りたるあとにも雪  
は降りつもりけり

一軍が迂回し來り忽ちにここに炎はあがりけ  
らしも

歸 途 其二

わが乗れる汽車の煙のかたまりはをりをり雪  
に觸れてなづさふ

雪降りてなべて障らふものなき國土の涯に  
黒きは何ぞも



かささぎは寂しき鳥か人住まぬ野の低木にも  
啼きとまりけれ

あらしひてつけたる跡もありぬべし雪のへに  
數多けだもの跡

汽車のおと過ぎ行きしかば冬の野に羊の群は  
かたまりうごく

車房にて幾度まどろまむとしたりしか赫爾洪  
得驛にもたたかひありき

松生ふる丘のおきふし見つつゆく汽車は南へ  
走ることがとし

おきふしのあやしき色の原中を汽車の窗より  
眼さへ放たず



札羅木特チヤムテにすでに近くて窗まどの外とを吹雪ふぶき吹き過  
ぐるありさま見たり

とりとめのなき平野へいやをば並車なみぐるま乾草かんそうつみて幾日いくひ  
かかよふ

雪ゆきぐもは西へ動きて蒼白あせじろき日の光ひかりつひに隠かくれ  
て見えす

雪ゆきふりてただに虚むなしく見えわたる此こゝひろき野  
を通たよふものあり

海拉爾ハイラルを過ぎて幾時いくときか野の上に雪の少すくなき處も  
見ゆる

降る雪は大きくなりて日本にっぽんの春の泡雪あわゆきに相あひあ  
へるごと



丘の上ちのうへに小ちさき墓ほ地ち見みゆ異こと國くにといへどもなべ  
て心こころにし沁しみむ

點てん在ざいする家いえ見みえ乾ほ草くさをかこへるが見みえ露ろ西し亞あ  
人ひとゆく

興しん安あんの山やまなみ近ちかく來きれるかものものしくも曇くも  
る空そらあり

歸途 其三

きびしくも雪ゆきの降ふりたる山やま越こえて馬ば車しゃはいづ  
こへ行いかむとすらむ

牙や克こ石しに日ひは暮くれむとして野のはてに灯ともし火びが  
見みゆ瞬またたく灯ともし火び



伊列克得を過ぎてより山の起伏に月あかり差  
すその奥の山

午後八時興安に著き暫しして隧道くぐる特殊  
なるおと

興安の山脈つづき通り来て興安嶺を月は照ら  
せり

土に即きて低きともし火時により瞬くごとし  
見らく寂しく

野のはてにともしび並ぶさびしさよ一線にし  
て高き低きなし

雪降れる冬野を照らす月かげは興安嶺の西に  
なりたり



汽車中に寐むとおもひしころほひは國土すで  
に月おちてゐき

寢臺車の中に目ざめて現身にありふれしはか  
なき事をもおもふ

山東の民ら年々にうつり來てここに耕すひく  
き家むら

ひむがしへ一夜走りし車房より見ゆる哈爾濱  
の空のあかるさ

黄に澄める地平の上の空ほそくその上部なる  
雪曇空

哈爾濱のあたりの空は黄にアカリ雪降りし野  
に鶺鴒くだる



時のまの心にあれど枯原かれはらに小さき鳥はむらが  
りておつ

ハルピンに間もなく著くか松花江スンガリイへそそぐ川  
見ゆ氷りわたりて

その半凍なかばりつきつつ松花江しょうくわかうの濁れるみづに浪  
たちわたる 十一月三日午前八時二十五分ハルピン著

哈爾濱

チチハルに雁飛がんぶときは太陽たいやうの光ひかりくらむこと  
二たび聞きつ

大部隊の馬賊夜中やちゆうにたちまちに正陽河せいやうがまで薄せま  
りし話



泰來仁、同義慶、同豐、大羅新寰球貨店等々  
がある

埠頭街二たびよぎりソビエット小學校のまへ  
にたたすむ

大きな支那餅を賣る店があり時無きゆゑに  
ただ見たるのみ

ハルピンの公園來れば榆の葉の青くすがれて  
残る幾ひら

ナハロフカ區に近づかむとしてこのあたり垂  
氷の長き家見て過ぎつ

棺商が折々目だつ木慶與徳局徳順成木局等の  
名を持つ



南 下 哈爾濱より長春

東支鐵道從業員の住宅にも防備トオチカ銃眼  
等見ゆ

暫くは眼をつむり居たりけり汽車あたたまり  
南へ走る

平安も孤獨にあらずまだ暗き汽車に目ざめて  
何かおもはむ

つらなめて日の暮るるまで通りけむ轍のうへ  
に雪降りにけり

もの慣れし様ならなくに東にあかねは凝りて  
低き國土



紅き雲あやしきまでに厚らにて棚びくときに  
山ひとつ見す

大國を旅ゆく朝やものものしく紅くなりたる  
雲がなびかふ

朝くらく哈爾濱を立ち雪ふれる冬野のうへに  
日は出でむとす

耀きて雲をいでたる朝日子を稀なるものの如  
しとて見つ

長春に近づく頃はかたまれる木々見えそめて  
親しくなりつ

露西亞語の三語五語おぼえしを片假名をもて  
書きとむるなり



雪降りて白くなりたる朝道が向うの村へ入り  
つつ行ける

東京に居れば朝寐をするゆゑにかかる太陽見  
ることもなし

朝明に長春に著きすぐさまに三十分の時後ら  
しむ

長春の停車場に来て日本語の電話のこゑを聞  
ける親しさ

長春の廣場を日本童子等がしきりに道草食ひ  
つつ行けり

満洲里のはつえといへる女の名友にたづねて  
手帳にしるす



吉林途上

冬の日は隈なけれども飲馬河の水も氷りぬ北  
へながれむ 十一月四日

東へ吾等むかへば雪ふりて吉林省の山は見え  
そむ

飲馬河も遙かになれど水おほき國へ入るらむ  
心は著し

下九臺既に過ぎつつ山の間の狭きに家居し畑  
さへも見ゆ

眼界はすでに清けくひくき山幾つつらなる雪  
降りにつつ



乾草を山のごとくに積みたりき家のめぐりの  
防禦のごとく

親しみてながるる水を見たりしが二たび山は  
遠くなりつも

やうやくに心しづかに黒き豚畑に遊ぶを見る  
べくなりぬ

吉林に入りても海拉爾の野のごとく野の上に  
孤獨なるひとつ山あり

禾本科の一つなれかも枯れはてし枯草うごく  
雪のうへにて

しばしなる點景にして鵲の巢にも雪見ゆ雛は  
居なくに



村近く川のながるるところあり農夫の一人が  
白き馬に乗り來

土們嶺より山地帯となりわが汽車は伐木した  
る峽を過ぎる

永き日の春日となればこの山の峽にも杏の花  
にほふとぞ

隧道のながきが果てて山べなる日向といへど  
雪はつもれり

大きな河ながれるて國土に降りつもりたる  
雪かがやきぬ 九站附近

昨日の夜にふぶきしものか此山の一方にして  
雪ぞたまれる



吉林松花江

吉林きりんの市街しがいに據りて松花江しょうくわ氷ひにこほりつつ東ひむがし  
むかふ

松花江スンガリイの空そらにひびかふ音を聞く氷こほらむとして  
流るる音を

海拉爾ハイラルをふたたび過ぎて松花江しょうくわの氷らむ時に  
吾は會ひにき

この河の氷らむとして流れゆくきびしき音を  
今ぞ聞きつる

眼まなしたにひびきをあげて氷こほり居をる吉林チーリンの河かはは  
おそろしきまで



わたりつつ言も絶えたり眼のまへを大流は  
氷らむとする

かくのごと凍りつつ行く河音のひまなき音の  
何にするとき

松花江の河の中より音ひびくながれのまにま  
氷の割るるおと

ひと断の激ちとなりてスンガリイの河の氷は  
ながれて止まず

くにとほく行方北向かふ冬河よスンガリイの  
氷は割れつつ流る

現なるものにもあるかかかれとて氷にこほり  
つつ逝く河のおと



はて遠くここに迂回する松花江の氷らむとす  
 る音のきびしさ

スンガリイは凍りあひつつ音ひびくその鋭きを  
 また聞かめやも

現身の世のものとしも思ほえず氷りつつゆく  
 河ぞ聞こゆる

時の間も氷の群はためらはすこの大河をうづ  
 めて流る

たえまなき峻しきおとは國断ちて北ゆく河の  
 氷らむ音ぞ

半櫓は吹雪おとろふる間を求めいまし松花江  
 の氷をわたる



吉林

雪降る日吉林に著きたり日本人吉林居留民會  
あり親し

松花江のきびしき音を聞きしより一時ののち  
北山の上

白雪の降りて氷れる山の上の寺中にして人ご  
ゑ聞こゆ

暫しくは眼を閉ちてこの山に吹きすさびたる  
風もこそ聴け

風鐸のつねに音する朶雲殿女の神はうすくら  
がりに



北山ほくざんに白雪しらゆき積みて樓觀ろうくわんをいで來たる人は薪まきを  
持もちたり

山寺やまでらの屋上おくじやうの雪飛ゆきばしたる風かぜつぎつぎに谷やまに  
音ねせり

眼まなこのわるき馬等うまらうが居ると語らひて一群ひとむれの馬うまに  
とほりすがへり

一袋ひとふくろ買かひて惜おぼしむが如ごとくせり長白山ちやうはくざんの松まつの木こ  
の實みを

しな街まちを暫しばし歩あひきて簡素かんそなる毛靴けぐらを買かひぬ當あた  
なけれども

日本にほんよりの旅人たびびとのためスンガリーの鮒ふなのあら  
ひを調理てうりしはじむ 名古屋館



雪こごるいたき寒さに天つ日の光てれれど外  
に出でかねつ

吾面も旅やけしつ年ふりし山邊の街に今夜  
かも寝む

間島のさまを寢床にて聽きをはりあらし水に  
て面をあらふ

吉林より四平街

丘陵の低くなだれてよこたふを道ひとすぢに  
白きもあはれ

雪降れる畑の中より家かげに豚の子ひとつ走  
りくる見ゆ



冬がれし葦原が見ゆかりがねの屯すること幾  
たびなるか

あめつちのひとつの相雪の間にみじかき草の  
そよぐを見れば

車房にて中華人唄の稽古をす  
ンハレー、ヤーパン、アアア……

おごそかに雪降り積みし山を去り長春に来て  
雪の解くるを見たり 長春

雪解けて衢のうへに小さな水脈をつくるは  
こころ親しも

赤土の日向掘り居る苦力等はかくのごとくに  
暫し住みつく



原<sup>げん</sup>始<sup>し</sup>よりの續<sup>つづき</sup>をなしてこだはらず此處<sup>こゝ</sup>に假<sup>かり</sup>初<sup>そめ</sup>  
の家<sup>いえ</sup>居<sup>ゐ</sup>をつくる

冬<sup>ふゆ</sup>ふけて眞<sup>ま</sup>澄<sup>すみ</sup>の果<sup>は</sup>のなかりける空<sup>そら</sup>にひたりて  
馬<sup>うま</sup>の行く見<sup>み</sup>ゆ 長<sup>ちやう</sup>春<sup>しゆん</sup>發<sup>はつ</sup>

かぎろひの夕<sup>ゆふ</sup>べの空<sup>そら</sup>のくらむまで鴉<sup>からす</sup>むるも  
寂<sup>さび</sup>しきものか

沿<sup>えん</sup>線<sup>せん</sup>に分<sup>ぶん</sup>遣<sup>けん</sup>所<sup>じよ</sup>ありただ一人<sup>ひとり</sup>の日本<sup>にほん</sup>兵<sup>へい</sup>が其處<sup>こゝ</sup>に  
立<sup>た</sup>ちゐる

しな國<sup>くに</sup>の旅<sup>たび</sup>あはれなり著<sup>き</sup>ぶくれて走る穉<sup>せいなご</sup>兒<sup>ご</sup>門<sup>もん</sup>  
に向<sup>むか</sup>ひて 范<sup>はん</sup>家<sup>か</sup>屯<sup>とん</sup>

澄<sup>すみ</sup>みきりし空<sup>そら</sup>に映<sup>うつ</sup>りて木<sup>こ</sup>立<sup>たち</sup>なき草<sup>くさ</sup>さへもなき  
丘<sup>かみ</sup>を人<sup>ひと</sup>行く



紅くれないのころもを著たるシナ童どう女ぢよ空そらをかぎれる線  
のうへに立つ

この驛ちゆうにたまたま駐屯ちゆうとんしたりける日本にほん兵士へいしも  
耳みみの保護ほごせり

丘陵きりやう群ぐんは分水嶺ぶんすゐをなすといふ松花江しょうかかうの支流しゅうりゅうと  
遼河れうがの支流しゅうりゅうと 公子嶺こうしりやう

四平街

家かいでて幾夜いくやか寝ねつるはるばると鴉からすのおほき  
國くにに來きにけり 十一月五日植平旅館しちがつごにふちひつりやう

四平街しへいがいのながき丘かみまで軍ぐんの先鋒せんぽうせまり來きりし  
ことしおもほゆ



暮れゆける此處の市街よ南下せる旅に疲れて  
一人寝にけり

起きゆくと疊のうへの光踏む曉がたの月かた  
ぶきて

ゆるやかに長き丘陵よこたはる此處にも吾は  
わかれむとする

四平街より鄭家屯

車中にて賣に來る森永ミルクキャラメル盛京  
公司味樂乳糖

四洮線朝立ちくれば遠々し草枯れし野に消の  
これる雪



ちかづかむ山脈もなき蒙古野の草のかぎりは  
冬枯れにけり

わが汽車の行のまにまにめぐりくる沙漠の涯  
に見ゆるは何ぞも

おほどかに脹みたりと見るまでに遼寧の野は  
光にきらふ

オポ山 (鄂博山)

天のしたのこの國土は起伏も崩れもあれやは  
枯れて冬さぶ

古への奚王嶺の名をもてるこの小さな山も蒙古  
野の中



見はるかす天あめの最中もなかにおのづから雲も起らず  
いやはてのくに

けむりなし溶けむとぞする蒙古野もんこの空にひび  
かふ雁がんも聞きこえず

ものなべて虚むなしくもあるか暮れむとしつつこ  
の天あめを動とく雲さへもなし

まどかなる天あめをかぎりて蒙古野もんこのきらへる涯は  
に陽ひはおちむとす

ここに立ち限りも知らにおぼおほしにこりた  
ゆたふ天あめを見むとす

空の涯のくれなるの日をふりさけて東蒙古ひがしもんこの  
山の上になつ



一つだに山の見えざる地のはてに日の入りゆ  
くはあはれなりけり

現身うづせみの住むとふものかけむりなす此土このつちの上うへに  
くぐもりたるは

遙とほかなるものはおぼろに溶けるつつかぐろき  
處人ところは住まむぞ

この地に相對あひむかふとき原始はじまりの人世ひとよおもひて心足  
らはむ

鄂博山おほほくさんのふもと通りてゆく道は遠きはたてに  
見えすなりたる

山川やまがはの清けきを來て極きまみなき波なみがたの國くに振り  
さくわれは



## 鄭家屯

このあたり群れとぶ雁は羽ばたきの聞こゆる  
 までに低くゆくとふ

聞くにだに心充たむを思ほえてかりがね渡る  
 空をこほしむ

この空をすでに黄河の以南までわたらふ雁は  
 渡りつらむか

鴻雁の羽ばたく音が川面の銜響とならむころ  
 をしおもふ

土ほこり風吹きあげて街中を昏くするとき吾  
 等歩きつ



目前まきまへに石塚いしづかがあり學良がくりやうの話はなし聴ききつつそれを見  
て居ゐる

滿鐵まんてつの業げふの大おほけきを對談たいだんに云いはざりしかど事こと  
眼前がんぜんにす

鄭家屯ていかん事件じけんを語る君きみが眼まなこのかがやく時は一いち秒びやう  
程ほどのみ

卓たふの上うへに中華史年表ちゅうわしねんひょうを貼はりつけて興亡劇こうぼうげき甚じんの  
念ねんを惜おししむと

日本にっぽんの茶室ちやしつ造つくりの部屋へやに寝ねて夜よふけむとする  
月つきかげが見みゆ

小房せうぼうに心こころやうやくしづまりてこの遍歴へんれきを感謝かんしゃ  
すわれは



金山驛

此處よりは未だ見えざる部落まで驢に乗りて  
ゆく人にしあれや

この夏に溢れし水に此處にても平たくなりぬ  
土の家居は

驢に乗りて行ける人等は砂山のうねりのかげ  
になりて見えずも

赤き棺ぼつりと野の上に置かれたり人死しぬ  
れば悲歎せられて

放牧の牛驢羊がうちまじり物襲なく見ゆるた  
のしさ



ことごとく平たくなりて一部落流れし跡あり  
 残念もなし

或處に來れば沼地に見え隠る細きながれもあ  
 りとおもはむ

野の上を横向きて行く人見れば驚くばかり長  
 身に見ゆ

歸路 (四平街迄)

おしなべて見るものもなき枯原に土の家群が  
 時に聚まる

地平のうへに淡然に置かれたるものの如くに  
 孤山がひとつ



土の家くづれし跡が幾つもありほしいままに  
も家移りたる

氣安くも家移りゆく民あらむ馬牛などを引連  
れながら

野のはてにかすかに見えし黒きもの近づけば  
高々と積みしほし草

あるところにては部落の真近くに氾濫したる  
砂原のあと

はつかなる茂みがありて雉子飛ぶかかる機縁  
もわれに親しき

夕がたに近くわが汽車さしかかる遼河の砂原  
もりあがりたり



地ち平ひらより大おほ雲くもいでてかがやけど空そらのひろらに  
驚おどかざらめや

礙さまたぐるものなき空そらのむら雲の雲の末すゑ邊べに雷らい鳴  
るきこゆ

平たひらより平たひらにわたるこの空そらに充みつらむ雲しおも  
ほゆるかも

奉天

二たびを奉天に來て居るひまに「乾尿かんし概けつ」の事を  
知りつる

愛かなしむゆふぐれの厚こう徳とく福ふくに入り來り來り烤か羊やん肉りよくの煙けむの香か



## 八木沼丈夫氏に寄す

日を繼ぎて遠山河の涯までわれ導きし君は瘦  
せたり

はるかなる旅なりしかばつつしみて酒酔ひし  
れしこともなかりき

導きし君がたまものやこれの世にありがたし  
とておもひ堪へずも

とほき旅なほし行かむとおもふにも共に飯食  
はむ君なしにあはれ

君なしに寂しけれども今ゆのち一人旅路の幾  
夜か寝ねむ



北平はなほし遙けしさむぐにひとりになり  
て吾は行くべし

君なくて直にし寂し  
大き國流るる河をわたり  
て行くも

くもり夜を君にわかれむひとりなる行方は白  
雪の降り來む旅ぞ

北平漫吟



平<sup>ひら</sup>沙<sup>さ</sup>あり  
黒々と見えはじめたる山なみの前<sup>まへ</sup>方に一<sup>ひと</sup>色<sup>いろ</sup>の

地<sup>ち</sup>平<sup>へい</sup>より鋭<sup>すど</sup>き山<sup>やま</sup>の見<sup>み</sup>ゆるとき未<sup>いま</sup>だかがやくあ  
かつきの月<sup>つき</sup>

北平途上



巖々としてそびえし山のつらなりに小さき三角の山がこもれり

鋭くも巖しき山のそばだつをみなもととして河ながれ來る

寒風の吹きまにまにひとしきり鶉飛ぶ見ゆ水あかるべに

窓外に見え來りつつ幾百か赤土の墳墓かたまりあへる

ひと色となりて平はよこたはる鋭くとほき山のかなたに

時により心きびしきものにして平野のうへの好山とほし



目のまへを鵲が飛ぶ鵲は水濱にも飛ぶかなし  
き鳥か

ひろがりて来る視界に波動のごと小鳥むれ飛  
ぶ何の鳥かも

山脈は極まりて見えす黄に枯れしたかき葦む  
らいづこまでつづく

山のうへにうねりて行ける石の城なほ山とほ  
く長き城はや

年古りし山の砦のうねれるを海への關にはじ  
めて見たり

山海關よりおこる山脈たたなはり奥の山には  
雪降りにけり



寒空の雲に觸りつつ長城はうねりて行けり幾  
谷わたる

日本の汽船も居りて白浪のとどろき寄する海  
のべ行くも

海のおとにぶくしながらたかまりし砂丘のさ  
まも島國ならず

やうやくに遠ざかるころ海のうへにかすかな  
る雲浮きつつゐたり

ひむがしに山海關の山脈は後へになりぬ日に  
照らされて

川青くうねりて流るるを見れば民の營み此處  
ゆ近からし



旅人は時に感傷の心あり犬ひとつゐて畑を歩  
く

山東を來れば一つなる相にて山の斜面にいま  
だ穴ごもる

石門を過ぎつつ目路の近くにも青き畑を見る  
べくなりぬ

冬の日の光やはらかき眞晝どき水のにごれる  
瀬河を過ぎつ

山に沿ひて流れてきたる大きな瀬の白沙に  
龍巻のぼる

しばらくは平野を走る遠そきて見ゆる山々藍  
になりたり



灤縣を過ぎて幾時の眺めかな紅くつらなる山  
の上の觀

あまつ日に照らされし地平の彼山は沙漠の山  
と相見る如し

旅とほき吾にもあるかしの國に低くよこほる  
黄なる山々

北平のはじめの旅に露西亞人と吾は起臥すひ  
とつ車房に

山々はやうやく盡きて平原を歩き行くとき緑  
の林を見たり

たちまちに大き鹽田の連りに雁とびまた海の  
うへの空



冬河がここに流れぬ向つ岸見えず濁りてあふ  
れむとする

沼水のひかりてゐるを幾處にも抱きてとほき  
葦原があり

おもはざる沙漠見え来て直線の運河鑿りあり  
海に到るか

冬ふけし空につづくと見るまでに白河の水は  
濁をあげぬ

棉の畑わが眼のかぎり續きたり夕ぐれ天津に  
近づけるとき

我心既におぼろに車房より青き麥畑しばらく  
見えつ